

『花の迷い仔』

著：沙野風結子

ill：小路龍流

これまでも、齋と頻(ひん)繁(ぱん)に逢えていたわけではなかった。この二年間は一、二ヶ月に一度のスパンだった。

齋の顔を見て、声を聞いて、顔を寄せて、さりげなく触れる。そのためなら、逢えない日々を積み重ねるのも苦ではなかった。

それは、太陽がかならず昇ると知っているからこそ、安心して夜を迎えられるのと似ていた。

——……でも、次はいつ逢えるかわからない。

ウーはバスタブのなかで膝を抱えながら、胸の激痛に呻く。

黒いバスタブに水は張られていない。ウーの左足首には鉄の輪が嵌められていて、それは蛇口に嵌められた鉄輪と鎖(くさり)で繋がっている。バスルームの明かりは点いていない。窓もないから真っ暗だ。

夕矢は零飛からウーのことを任されたと言っていたが、それはもしかすると、生き死にも含めて任せるという意味だったのかもしれない。

ここに連れてこられてから丸一日ぐらいたったはずだが、夕矢は様子を見にバスルームを覗(のぞ)くこともなく、またパンのひと切れすらウーに与えなかった。それでも空腹を感じないのは、肉体より精神のほうがつらいからなのだろう。

——……この鎖は外せない。水だけはあるから、しばらくは生き延びられる。

そう考えた直後に、乾いた声の自問が口をついて出た。

「生き延びて、それで？」

フィールドパンツの膝に額を押しつける。

生き延びて脱出したところで、零飛を怒らせてしまった以上、もう齋には逢えない。齋を危険に晒すことだけはしたくなかった。

「……なんで、俺はこうなんだ」

頭を搔き毟(むし)り、拳で殴る。

もっとシビアに考えて、千翼幫と親交のある組織の情報は齋に流さないでおけばよかった。そうしたら、これまでの日々が明日も続いていたのだ。

自分の愚かさが、唯一無二の太陽を黒く塗り潰してしまったのだ。

「イツキい」

布に滲(し)みた涙が、膝を湿らせていく。

膝に顔を伏せたまま、腫(は)れた瞼(まぶた)を開いた。天井の明かりが点けられていた。すっかり暗闇に馴(な)染(じ)んでしまったせいで、光が目(め)に沁(し)みる。

ウーが重い頭を上げたのと同時に、バスルームのドアが開いた。しょぼしょぼと瞬(まばた)きをして、入ってきた人間を見る。

その人はまるでウーなどいないかのようにシャワーの前に立った。ヘッド部分からザッと湯が放射される。

「——」

ウーは唾(あ)然(ぜん)として、柳夕矢の裸体を眺(なが)めていた。
夕矢はシャンプーの粘液を手に垂らすと、首を大きく反らし、目を閉じて、髪を洗いはじめた。

——……こいつ、なに？

男同士だから裸を晒すのはなんともないのだろうし、ここは夕矢のマンションなのだからシャワーを使うのもおかしくはない。

しかし普通、丸一日監禁されて気が立っている人間の手の届く場所で、こんなふうは無防備になれるものだろうか？

ウーがその気になれば、いま夕矢を攻撃するのは容易(たやす)い。そこまでして生き延びる意味が見つからないから、しないだけで。

髪を洗い終わった夕矢は、黒髪をオールバックにし、今度は身体を洗いはじめた。ウーの視線はボディタオルの動きに合わせて移動していく。

腕も胸も腹部も尻も脚も、しなやかなラインで実戦向きの筋肉がついている。

——俺の身体のほうが、粗(あら)いな。

骨格からして、だいぶ違う。ウーの肉体は急速に成長したせいで、まだ青臭いアンバランスさがある。対して、夕矢の肉体はきちんとパーツが組まれた完成体だった。

筋肉もウーのものが野生動物系だとすると、夕矢のものは体術の細やかな動きを可能にする高度な強(きょう)靱(じん)さを具(そな)えている。

こうしてただ身体を洗うだけの行為でも、夕矢の動きは無駄がなく的確だ。

泡だらけのボディタオルが一度、シャワーで洗われる。それからふたたびボディソープが垂らされて泡立てられた。その行く先を、ウーは目で追う。

下腹に垂れているやわらかい茎が、タオルで包まれた。扱(あ)く動きで洗われていく。タオルが離れると先端から泡の塊(かたまり)がぬるりと滑り落ちて、暗いピンク色が現れた。

夕矢はウーの存在を完全になくしているらしい。なんの躊躇(ためら)いもなく、左の足裏をバスタブの縁に載せた。

「……っ」

会陰部を開いて見せられて、ウーはさすがに息を呑む。

夕矢の顔を盗み見るが、その一重の目は伏せ気味にタイルの床へと向けられている。さらに行為が続けられる。

脚のあいだに滑り込むボディタオルに、ウーは視線を撮(から)め捕(と)られる。タオルが会陰部に掌(てのひら)でやんわりと押さえつけられる。わずかな指先の動きまでも丸見えだった。深い場所にある窄(すぼ)まりを摩(こ)るように中指がくねる。

夕矢の腕が宙に伸び、シャワーのノズルを掴んだ。壁のフックから外されたシャワーが下腹に寄せられる。性器を叩いた湯がウーの顔へと跳ね飛ぶ。

身体中の泡を綺麗に流すと、夕矢はバスルームから出ていった。明かりが消され、闇(やみ)が戻る。

しかしその闇は、先ほどまでとは違う粘度を孕(はら)んでいた。

「————」

ウーはバツと蛇口に飛びついた。勢いよく放たれた水がバスタブの底を打つ。

痺れている頭を水に突っ込む。そうして、両手で水を掬(すく)い、顔に叩きつけた。

性的なことに対する嫌悪感に、吐き気がしていた。その吐き気を散らすために、水を飲む。ここに閉じ込められてから初めて口にした水だった。一度飲み込んだら、すさま

じく喉が渴いていることに気づいた。

水をさんざんガブ飲みしてから、蛇口も締めずにバスタブの底に、膝を立てて仰向けに転がる。身体の裏側に浅い水の流れを感じる。

目を閉じると、少し濁った青空が瞼の裏側に映し出された。

幼いころ……まだ家族と一緒に暮らしていたころ、よく兄と遊びに行った河原だ。その浅瀬に、ウーは仰向けに身を浸している。

逆さまになっている世界に、ひとりの子供が立っている。ウーの兄だ。兄だけれども、戸籍上、兄はひとりっ子だ。

国のひとりっ子政策により、次男であったはずのウーは黒孩子となった。戸籍もない。あらゆる保障も、教育も受けられない。まともな職に就けない。家畜程度の人生しか送ることができない。死さえも、個人の記録として残らない。

「俺は……いるけど、いない。どこにも、いない」

兄が腰を落とし、なめらかなフォームで石を投げる。石が何度も何度も水面を叩いて跳ねていく。

「ウー」

呼びかけられて、河原へと視線を戻すと、そこにはひとりの男が立っていた。真っ白いワイシャツが眩(まぶ)しい。温かな微笑を浮かべて、手を差し伸べながら彼が言う。「ウーはここにいるし、僕もここにいる。ウーはちゃんと、僕の横にいるだろう」

——イツキ。

手を伸ばして、その手を握ろうとする。

握ったとたんに、斎が消えた。

慌てて瞬きをすると、あたりは闇一色だった。

しかし目の深い場所には、かすかな煌(きら)めきが残像のように留まっていた。深海から太陽を見たら、こんなふうなのかもしれない。遠いけれども、消えたわけではない。

生きたいという思いが、込み上げてきた。

本文 p25～35 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>